

岡本韋庵のメッセージ

有馬卓也

目次

はじめに

第1章 主要刊本の紹介

第2章 岡本の危機感—明治という時代

第3章 著作に託されたメッセージ

第4章 岡本理解への二つの頂

おわりに

はじめに

樺太・千島探検で知られる岡本韋庵（一八三九—一九〇四）は一方で生涯を通して三九種の著書（現在確認済みのもの）を出版した当時を代表する文人の一人でもあった。加えて出版に至らなかった草稿も数多く、これらは現在徳島県立図書館に収蔵されている。

岡本は当時の人々に何を訴えたかったのか、何を著作に託したのか。本稿は岡本が著作に託したメッセージを整理し、概括することによって岡本の思想の一端を明らかにし、加えて岡本理解のための問題点を提示しようというものである（註1）。

第1章 主要刊本の紹介

まず岡本が生涯を通して出版した全三九種である（一）内は岡本の年齢。

慶応 三年（二九）	…『北蝦夷新誌』
明治 四年（三三）	…『窮北日誌』『北門急務』
明治 九年（三八）	…『東洋新報』
明治 一二年（四一）	…『万国史記』『要言類纂』
明治 一三年（四二）	…『小学読本農学入門』
明治 一五年（四四）	…『小学新編』
明治 一六年（四五）	…『小学修身新書』
明治 一七年（四六）	…『万国通典』
明治 一八年（四七）	…『古今文髓』『義勇芳軌』『国史紀要』
明治 一九年（四八）	…『励業新書』
明治 二一年（五〇）	…『儒学—孔孟学・老荘学』（註2）
明治 二二年（五一）	…『岡本子』
明治 二三年（五二）	…『祖志』
明治 二四年（五三）	…『儒学精彩』『神道發揮』

明治三五年（五四）…『千島見聞録』

明治三六年（五五）…『開国富強要覽』『耶蘇新論』

明治三七年（五六）…『支那學—經學』（註3）

明治三八年（五七）…『皇道鼓吹』『名神序頌』『万民宝典』『韋庵小詩』

明治三九年（五八）…『越山先生伝』

明治三〇年（五九）…『論語正本』

明治三二年（六一）…『教育勅語正解』

明治三三年（六二）…『亞細亞之存亡』『國文之葉』

明治三四年（六三）…『孝經煩解』『鉄鞭』『西学探源』『大日本中興先覺志』

明治三五年（六四）…『知新學源』

明治三六年（六五）…『日本維新人物志』

刊年未詳…『教育勅語講談』

筆者はこのうち三〇種（註4）を入手し、現在一つ一つ読み進めているが、これらは一見雑多なようでも一本の線で結ばれているとの考えに至っている。以下簡単にこれらの著作を紹介してみたい。

まず樺太・千島関係の著作。慶応三年の『北蝦夷新誌』、明治四年の『窮北日誌』と『北門急務』そして明治三五年の『千島見聞録』がこれにあたる。これらはいずれも対露政策としての北方領土開発の必要性を主張したもので、単なる樺太・千島の探検報告にとどまらない。

たとえば、樺太（北蝦夷）について言えば、慶応二年、函館奉行杉浦兵庫守に提出した「北島の急務を論ずるの書」（註5）に見える「露人の北蝦夷島に来るものを年を逐て漸く多し。痛憤の至に堪へず」（岡本氏自伝）

「久春（クシュナイ）内滞在の魯人ども已に二百余人に及び、奥地本所には三百人もあるべし」（岡本氏自伝）

「務めて多人数を移して、地利を興し、魯人の我に害を加ふるを見れば、赤手もて捍禦し大義を万国に貫徹せしむるやうあらまほしき事なり」（岡本氏自伝）

といった記述から推しても単なる探検報告に止まらない事は明かである。そして実際、上記の著作には

「余の柯太に赴くや、特に全島の形勢を探りて、国家の大計を陳べんとするなり」（窮北日誌）

「今や皇運復古、業、前世を超ゆるに、柯太未だ開けず。豈に国家の一大闕典に非ずや」（窮北日誌）

「北島なければ是れ南島なく、南島なければ是れ中国なきなり」（開拓事宜）（註6）

「魯、柯太を開く。其の志、樺太に止まらず」（開拓事宜）

といった文が見え、岡本が日本経営・対露政策という視点に立った上で樺太開発を論じていることがわかる。これに次に示す南摩綱紀（註7）の序文を併せ考えれば、より明確に理解されよう。

「国家方今焦眉の急は北蝦に在り。苟も北蝦を失はば、則ち北

海道以南は保つたはず。真に齒寒の憂なり。若し廟堂の此書を観、若人(岡本)に任じて開拓撫御の術を尽すを得しめば、則ち広疆雄視の業、魯・英・普・仏諸国をして独り其の盛を擅しにせしめざるなり」(南摩綱紀『嶺北日誌』序)

また千島についてもそれは同様であり、明治二十四年一月に岡本が提示した「千島を開拓するの告文」(註8)には

「千島の我に於て輕棄すべからざるは、人身に足膝あるが如し。病ありとして輕しく断たば、忽ち全身に禍せん。生等、近来千島の長く無人の地となり、外人出沒して漁獵を擅にする状を聞き長大息の至りに堪へず」(「千島を開拓するの告文」)

「千島の利源は真に測るべからざるものあるに似たり。方今諸國震災の言ふに忍びざる惨状あり。他領に暇あらざるが如しといえど、千島の事情は全國同胞一般の上に關し、震災等を救済すべき緊急の要務たり」(「千島を開拓するの告文」)

とあつて、日本領でありながら多大なる利益をもたらす千島を手つかずの状態に放置し、しかも「外人」がわがもの顔で漁を行つてゐるという現状を訴えている。かかる思想の結実が『千島見聞録』であつた。

このほか後の日露戦争の際、千島に居住し、そこが日本領であることを身を以て主張した郡司成忠(註9)の『千島拓殖演說筆記』(註10)にも岡本の名が見える。その記述によれば、郡司は新聞に掲載された岡本の千島義会の記事を通して岡本を知つたようであり、岡

本がかなり活動的に仕事をしていたことが推定できる。

次が岡本の思想の基層を為す中国思想關係、明治二十一年の『儒學』、明治二十四年の『儒學精彩』、明治二十七年の『支那學』、明治三〇年の『論語正本』、明治三四年の『孝經頌解』である。ただしこれらも中國古典に注釈を加えるような、いわゆる訓詁學や考証學の類の書ではなく、岡本自身が中國思想を消化し、みずからの血肉となつた成果と言え、そういった意味で、次の岡本自身の思想を述べるグループと非常に線引きが難しい部分がある。

ではその岡本の思想が述べられてゐる著作群。明治二十二年の『要言類纂』、明治二十五年の『小學新編』、明治二十二年の『岡本子』、明治三四年の『鉄鞭』と『西學探源』、明治三五年の『知新學源』である。これらの著作はいずれも、たとえば志を立てることや徳を養ふことの意義、家庭の在るべき姿、祖先を敬ふことといった倫理的問題から、政治や經濟、軍事といった社会的國家的問題を、テーマ別に古典や歴史などに例を取りつつ論じたものである。『要言類纂』がその基本にあり、それを子供たちの教育という視点から再編した『小學新編』、完成型としての『岡本子』、また『鉄鞭』と『西學探源』は上海商務書館で發行された中國向けのもので、『鉄鞭』は中國の古典と歴史がベース、『西學探源』は西洋の古典と歴史がベースとなつてゐる。以下に掲げる各著作の目次を見れば、これらが同系統の著作であることが理解できよう。

『要言類纂』一巻一：事天第一、立志第二、善徳第三。卷二：明倫

第四、居家第五、处世第六。卷三：知人第七、莅官第八、為政第九、司憲第十。卷四：議兵第十一。卷五：衛生第十二。卷六：勸業第十三。

『小学新編』——卷上：孝弟第一・忠誠第二・敬和第三・信讓第四。

卷中：苦學第五・自立第六・操行第七・言語第八・威儀第九・攝生第十・節用第十一。卷下：涵養第十二・省克第十三・度量第十四・慈仁第十五・教育第十六

『岡本子』——第一卷：儀範第一・藝業第二・學統第三。第二卷：力行第四・體仁第五・一貫第六・万物第七。第三卷：論心第八・論性第九・天說第十。第四卷：道器第十一・陰陽第十二・鬼神第十三。第五卷：政法第十四・君道第十五

『鉄鞭』——卷一：生編上（講學・訓蒙・學戒・教弊）、生編下（文則・學制・実業・至誠・一仁）。卷二：長編上（父子・尊卑・君臣・忠純・宏毅・夫婦）、長編下（性徳・道權・物心・礼讓・義命・制節）。卷三：收編上（君長・侍御・宰相・議員・法官）、收編下（諸貴・商賈・農工・山林・池溲）。卷四：藏編上（武技・壯胆・死節・禦侮）、藏編下（聖徳・雄圖・天討・史徴・祖志）

『西学探源』——卷一：學習第一・教育第二・倫理第三・藝業第四。卷二：省克第五・宏毅第六・仁儉第七・廉信第八。卷三：報國第九・講武第十・經濟第十一・法律第十二。卷四：言論第十三・政事第十四・君道第十五・外交第十六。

五種の著作に於て共通する項目が多いことが認められよう。

次に岡本による啓蒙的著作、とりわけ日本理解・西洋理解に関連するものを挙げてみる。明治一二年の『万国史記』と明治一七年の『万国通典』、明治一八年の『古今文體』、『義勇芳軌』、『国史紀要』、明治二三年の『祖志』、明治二四年の『神道發揮』、明治二六年の『耶蘇新論』、明治二八年の『皇道鼓吹』、『名神序頌』（註11）、明治三三年の『亜細亞之存亡』、明治三四年の『大日本中興先覺志』、明治三六年の『日本維新人物志』がこれにあたり、岡本の著作の中でもこのグループが一番数が多い。

その当時の日本の歴史は、もちろん天照大神から始まる国史であつた。この神代史から始まる日本の歴史を学べば、つまり神話を史実として学べば、当然国家観・世界観も大きく異なってくる。そのような意味で岡本が著した小学生向けの国史教科書『国史紀要』は、岡本の日本理解の根本を知る上で重要な一書であろう。また国史の中から、天皇の系譜を中心として叙述したものが『祖志』である。巻一の神代志から巻一〇皇代志まで、天地開闢から応神天皇に至るまでの叙述となつている。さらに「夙に支那に行はる」（註12）と評された『万国史記』と『万国通典』（註13）は岡本の初期代表作と言つてよく、『史記』が日本を含む世界各国の歴史を、『通典』が世界各国の制度や政治を記したものである。ちなみに岡本自身が中国に於てこの両書がよく読まれたことを知つたのは明治三〇年代に入つてからのことで、『鉄鞭』に寄せられた牧放浪（註14）の序文に

「韋庵岡本先生、……嘗て『万国史記』を著はし、漢土に行はる

ること、年あり。先生、未だ之を知らざるなり。今に至りて之を知りて歎じて曰く「鳥呼、我が帝国の我を知る者甚だ少し。而るに漢土の人、乃ち我を知る者あるか。何ぞ其れ異ならんや。……」

と『鉄鞭』牧放浪序

とある。

さらに中国と日本の名文を集めた『古今文髄』、日本と中国の義勇の士を列伝形式で集めた『義勇芳軌』(註15)、その明治維新版とも言うべき『大日本中興先覚志』(註16)と『日本維新人物志』(註17)。そして当時アジアを侵食していた西洋の危険性をキリスト教批判という形で説いた『耶蘇新論』と、より直接的に日本の現状にはそぐわないと岡本が考えた西洋的平等論の悪しき日本的展開を説く『亜細亜之存亡』。こういった著作群がこのグループとなる。

この他、明治一〇年四月から翌年一二月にかけて五〇回近く発行された『東洋新報』、実学方面の著作である明治一三年の『小学読本 農学入門』と明治一九年の『励業新書』。特に『農学入門』には西洋の最新の研究の引用が随所に見える。また岡本と同郷同門で東京府知事や文部・通信・法務などの大臣職を歴任した芳川顕正の半生記である明治二九年の『越山先生伝』。そのほか、もともとは出征兵士のために書き記していた様々な知恵を一般書として書き直した明治二八年の『万民宝典』(註18)、国語の乱れを嘆き正しい国語表記の在り方を記した明治三三年の『国文之乗』(註19)、教育勅語の解釈を論じた明治三三年の『教育勅語正解』及び刊年未詳の『教育勅語講談』

など、多彩な内容の著作群がある。

これらの著作、先ほど一本の線でつながると述べたが、簡単にまとめると次のようになるう。

すなわち、アジアを侵食する西洋列強、とりわけ北方(樺太・千島)より侵入しつつあるロシアに対し、樺太・千島経営の必要性を主張しつつ、国民が国家に誇りを持つ、そして神代史より始まる国史に誇りを持つ、強い日本・強いアジアを求めていた、そしてその強さとは義勇という精神的なものと、殖産興業に基づく経済的国力を意味していた。これが岡本の思想の基盤であり。彼の著作群を通貫する信念であった。

では次により具体的に岡本はどういった問題意識に基づいてこれらの著作を世に問うたのか。以下、これらの著作の記述をいくつか紹介しながら岡本の問題意識・危機意識、そして彼にそういった意識をもたらした明治という時代についてもう少し詳しく述べてみる。

第2章 岡本の危機感―明治という時代

少なくとも岡本は明治という時代に、あるいはその前の幕末という時代から、常に不満を抱いていたように思われる。とりわけ明治以降、その不満の対象は国家或いは国民のありように向けられていた。たとえば次のような文がある。

「今日我国人心の浮薄にして品行の墮落せるは……」(『亜細亜之存亡』)

「其の中寿を保たしめば、……決して今日の如く人心腐壞し、君父を侮り滅するには致らざらん」『大日本中興先覚志』高杉晋作

「我が醇粹なる徳化の如きは、乃ち衰頹するの傾あるを覚ゆ」

『勅語演説』

ここには当時の人々が、「人心浮薄」「品行墮落」「人心腐壞」、そして「君父を侮り滅する」者として痛罵され、日本人が本来有していた徳は衰頹してしまつたと嘆いている。二番目は高杉晋作の伝記の末尾に添えられた文章で、もし高杉晋作が明治以降も生き続けていたならば、日本もここまで腐敗はしなかつただろうという心情が述べられている部分である。また三番目の『勅語演説』（註20）は、岡本が徳島中学校長だった時に学生に向けて教育勅語について講演したものである。

岡本のこういった記述は枚挙に暇がないが、ではこのように当時の日本人が「人心浮薄」「品行墮落」といった状態に陥ってしまった原因はどこにあると岡本は考えていたのであるか。その一つを岡本は日本にはそぐわない西洋の学問や宗教、いわゆる洋学の重視にあったと考えていた。『勅語演説』にも「我が醇粹なる徳化の如きは、乃ち衰頹するの傾あるを覚ゆ」とあったが、これに次の二文を合わせ考えれば理解できよう。

「亜細亜の存亡は、今日に在り。我が大日本国の存亡も、今日に在らんとす。何もて然りといふや。其説は一にして足らざるも、社会平権・人身同等の説より甚しきはなし。是は君父を凌蔑し、

忠孝を抹殺するものたり」『亜細亜之存亡』

「維新以来、外交頓に開け、天下皆富国強兵を期し、各国と敵対角立す。而して従前の教育は、専ら道徳を主とし、往々にして固陋迂怪、時情に通ぜず、世人之を厭ふ。西学を言ふ者は、皆知育智育を尚び、哲学教法、先を争ひ競進し、適従する所なく、之を久しくして老成彫謝し、殆ど道徳を談する者なし。謂ふ「忠孝は人道の先ずる所に非ず」と。詭弁縦横に譏張し、甚だしきは父母を孝養するは人子の義務たるや否やを疑ふに至る」『越山先生伝』

現代的観点からすれば社会平等・人身同等の説は問題ないように思われるが、当時の天皇を中心とした、そして先に言及した神話から始まる国史を学んだ人々の明治であることを思いおこすべきであろう。先の『勅語演説』そしてこの『亜細亜之存亡』に見える「君」とはもちろん天皇をさす。

さて、明治八年に洋学者によつて、欧米の学制を参考に起草された実学重視の学制が頒布される。これは儒教的教育の理念を否定したものであった。これは明治一〇年代には一つの反省となつてあらわれ、たとえば明治一二年に発布された『教学聖旨』には「教学の要、仁義忠孝を明かにして、智識才芸を究め以て人道を尽すは、我祖訓国典の大旨、上下一般の教とするなり、然るに輒近専ら智識才芸のみを尚とび、文明開化の末に馳せ、品行を破り、風俗を損ふ者少なからず」

といったような一文が見える。もともと日本に於ける教育の要は仁義忠孝にあり、その上で知識や技術を学ぶべきであるのに、今の日本は知識や技術が先行して仁義忠孝がないがしろにされ、品行・風俗ともにすたれきついているといったものである。先の岡本の指摘とはほぼ同質のものと見えよう。ではどういう形で、どういうふうに、この現状を打開すればよいのか。「教學聖旨」にもあったように、仁義忠孝の教えを改めて最も大切なものとして考え直すというのが明治政府の考えであり、それは岡本の考えでもあった。次の資料がその例である。

「韋廉曰く「方今天下、西学に心酔し、東洋に孔孟聖人の教へあるを知らず。余、之に忠告し、世運を挽回せんと欲す。……」と」

『『耶蘇新論』太田代恒徳序（註21）』

この『『耶蘇新論』』は岡本がキリスト教倫理と儒教倫理を比較して、当時の日本には思想的にも政治的にもキリスト教倫理がそぐわないと位置づけたもので、その意味からも西洋倫理に対する儒教倫理という岡本の思想がはつきりと読み取れるものとなっている。

最後に岡本の実感として述べられた一文を紹介してみる。

「子弟を教授すること数千万に及ぶ。其の人、往往にして青紫を紆^{きと}ひ、余が上に坐し、倨傲^{せんてん}鮮^{せん}腆^{てん}（註22）、旁らに人なきがごとし。

余、深く其の教養の効なく、道義の地に墜つるを悲しむ」（『越山先生伝』）

明治二九年に書かれた『越山先生伝』に見える岡本の自らの現状

に対する述懐である。

第3章 著作に託されたメッセージ

では次により具体的に彼の主張を読み取っていききたい。先の『『耶蘇新論』』に岡本の儒教倫理の主張、孔子や孟子の教えを重視すべきだという考え方が見えたが、それは既に日本にも古来存するものであり、綿々と続いてきた歴代天皇の治世にそれは明らかであると考えていた。たとえば次の記述である。

「我が天祖至盛の明德、之を支那の陶癭虞舜に比して蓋^{けだし}過ぐるあるも、及ばざること無きなり」（『勅語演説』）

岡本は自分が生まれ育った日本という国家に誇りをもっていた。それは明治六七年に中国の山東省や河南省を巡った際の日記にもはつきりあらわれており、中国人の日本という国家に対する賞讃に対して、日本は天皇が一姓綿々として統治する何者にも侵されない独立（厳立不羈^{げんりつふき}の）国家であると明言している。以下の如くである。

「慶鏗（註23）、余に問ひて曰く、「貴国の王は云々」と。余曰く「我が邦の皇統、一姓綿々として変はることなし。然れども中国は古より姓を易ふること多し。是れ聖人の欲する所に非ず。……」と」

『『支那遊記』』（註24）明治六年一〇月（二九日）

「積善曰く「日本人洋服を服す。豈英と戦ひ敗れて英に降るか。美国となるか。」余曰く「大日本天皇、善を四方に取る。ただ其長ずる所を察するのみ。佗あるに非ず。我大日本開闢以来、厳立不

羈の国にして、安くんぞ英美諸国に降る理あらんや。……」『烟台誌』(註25) 明治七年一月二八日)

「其人の曰く『國王の冊封(註26)は、何の代より始まるや。國中に孔子を貴ぶことを知るや』。余乃ち大書して曰く『大日本天皇、開闢より今に至るまで、一姓綿々として儼立不羈なり。本是自由・自主・独裁無外の大君主。開闢以来、未だ嘗て人の封冊を受くこととあらず。……』」『烟台誌』明治七年一月三〇日)

これら文を見れば、岡本の国家に対する、また日本における天皇に対する意識がある程度うかがい知ることができよう。これはたとえば、他者に対しては、「蕪然忠愛の心を振起せしむ」『国史紀要』例言)という形で、小学生たちへの国史の教科書の巻頭言として提示されることになる。ここに「忠愛の心を振起せしむ」と岡本が明言しているということは、逆に考えれば当時の日本において、国に對する「忠愛の心」が希薄になっていた証拠でもあろう。

また次の様な記述もある。

「忠勇義烈の行は、人の情の已むべからざるに発す。綱常を扶植し、国基を鞏固にする……区区たる報国の志、自ら已むあたはざるのみ」『義勇芳軌』自序)

「報国の二字は、吾が兄の本領にして、平生の著作は、皆此より出づ」『義勇芳軌』中村敬字序)

ともに「報国」という言葉が見え、とりわけ後者では中村敬字(正直)が、岡本の著作はすべてこの「報国」の心からでたものである

と評している。とすれば、岡本が抱いていた明治という国家への不満、ひいては明治という国家の病巣がここから明らかになってくるのではない。特に時の明治一〇年代は最も欧化政策はなやかなりし時代であった。まさに日本の伝統的なよさも西洋文明の前では日本古来のものだからというだけで否定され、その存在価値を認められない風潮があったことは周知の事実である。これは当時の幾多の知識人たちがその危険性を声高に主張していた。そういった運動の中の一人として岡本を位置づけることができよう。

また次のように日本は君主と臣民が、君臣關係の徳目である忠と、父子關係の徳目である孝を兼ねるのだという記述もある。

「固より我が國の臣民は君臣の義にして、父子の親を兼ねるものとす」『勸語演説』

この場合、君主に対する忠、親に対する孝を区別し、王朝が変わることに血を流しつづけてきた中国批判でもあり、そういう意味でも先の日本の皇室の皇統が「一姓綿々として」という部分や、日本が中国から仁義忠孝という思想を輸入する前からその実質は存在していたのだという言葉の裏付けとなる。

そしてこれは次のような主張に当然のごとく行き着く。

「外美を羨みて國粹を忘るることなかれ」『勸語大意』(註27)

ただでさえ欧米諸國がアジアを侵食している当時、その欧米をうらやむことばかりをして日本本来のよさ、或いは日本國民であることの誇りを失ってどうするかという主張である。この思いに至っ

た岡本が国民に求めたのは日本人としての誇りであると同時に、かつての日本人が持っていた「義勇」の精神であつた。

「義勇とは義に仗り勇を鼓するなり。公に奉ずとは國の爲に奮ひ前むなり。奉とは是れ捧獻の義なり。其の身を致して仁を成すを謂ふ。國家の命脉の係る所は、唯だ人民の精神に在るのみ。人民にして義勇なきは、猶ほ樹木の本根なきがごとし」(『勅語大意』)

ここに日本という國家に対する岡本の危機意識を見て取ることが出来る。とすれば、先に述べた人心浮薄、品行墮落、人心腐壞、そして「君父を侮り滅する」という当時の日本の風潮が、いかに岡本にとつて嘆くべき現状であつたかということは想像に難くない。次がそれにあたる。

「万国、往来親睦し、長を取り短を補ふを之れ崇ぶ。切に祖徳を妄却し、外美の牢籠する所と爲るを恐る。國家の盛衰強弱は、必ず道徳の汚隆に從ふ」(『勅語大意』)

ここで「國家の盛衰強弱は必ず道徳の汚隆に從ふ」と明言しているように、岡本の頹廢した道徳へのいらだちは、それが國家の行く末に直結すると考えていたからに他ならない。

第4章 岡本理解への二つの頂

岡本理解のためには二つの巨大な頂を越えねばならないと考える。ひとつは教育勅語の問題であり、今一つはアジア主義の問題である。筆者はこの二つの問題に対し未だ明確な解答を持ち得ないが、本章

では現段階に於て筆者が言及可能なことのみ述べておきたい。

一 教育勅語問題

先に言及した明治六年の学制を踏まえた「教學聖旨」を前史とする教育勅語が發布された明治十三年、首相は山県有朋であり、文部大臣は芳川顕正であつた。ともに岡本の知音と言つてよく、岡本は特別な感慨を以てこの教育勅語を見ていたに相違ない。

さて、教育勅語成立に至るまでの経緯について今一度簡単に触れておこう。明治五年八月、日本最初の近代制学校制度を定めた法規学制が頒布される。これは仏學者箕作麟祥らを中心とした洋學者によつて欧米の学制を参考に起草されたもので、従来の儒教的教育理念を否定し、個人主義・実學主義を原理として全國民に自立自營の能力を養う実學教育を学校教育の目的とした。しかし経済的な問題(学校経営は授業料と学区住民の負担を原則とした)に加えて、授業内容が欧米の翻訳が中心で欧米模倣の教科書を用いた結果、民衆の實際にそぐわず、加えて新教科を教へ得る教員も少なく、学校教育は著しく形式化して民衆の反感を買つた。この経緯については岡本も「維新以来、文部省は屢々学制を發し、變更一ならず。彼此の矛盾して、復た統紀なし。……此の時小学教師、往往にして其の人を得ず。蓋し維新前に在りては、専ら德育を主とし、自余の技能を要せず。故に父子相承け弟子と爲る者多し。其の教師に推服するも亦宜なり。而るに維新後、多くは智育を主とし、智識大いに進み、前日單純の教に服せず。是に於て従前の教師は皆無用の長物に屬し、

始めて少年教師を用う」(『越山先生伝』)と述べている。

この反省を受けて成立したのが先にも少しく言及した明治一二年八月の教學聖旨であり、それをうけて翌九月に學制が廢止され、教育令が制定される。さらに翌一三年二月には教育令が改正され、一四年三月には學校令と、試行錯誤が続く。そして明治三三年一〇月の教育勅語發布へと至る。

岡本の『越山先生伝』の言を借りて勅語成立時の状況を示すならば、第2章でも提示した「西学を言ふ者は、皆知育智育を尚び、……殆ど道德を談ずる者なし。謂ふ「忠孝は人道の先んずる所に非ず」と。詭弁縦横に譁張し、甚だしきは父母を孝養するは人子の義務たるや否やを疑ふに至る」(『越山先生伝』)のほか、

「先生、恐惶して命を奉ず。退きて竊に謂ふ「吾が国は自ら忠孝仁義の道あり、人心に存す。他に求めを待たず。知り易く行ひ易く、至公至正なり。之を万世に伝へて弊なし。諸を万国に施して通ぜざるなし。安ぞ彼の耶蘇を待たんや。安ぞ彼の仏教を待たんや。其の道實に孔孟に直に過ぐ。孔子の道德、固に間然するなし。而るに其の学を為す者は、往々にして一偏の弊あり。是れ知らざるべからざるなり。今、我が国の爲に教へを設くるに、宜しく我が邦固有の道に従ふべし」と」(『越山先生伝』)ということになろう。

教育勅語の成立や内容についての細かな議論は他稿に譲るとして、ここではその基本精神について簡単に述べておきたい。それは、天

皇の有徳と臣民の忠誠を基本として、一四の徳目を提示し、これらは永遠に遵守されるべき普遍妥当性を持つと述べたものであった。この教育勅語が示す方向性は、まさに岡本が著作を通して訴えていた主張と一致する。

岡本が上梓した勅語関係の書籍に明治三二年刊の『教育勅語正解(註28)』と刊年未詳の『教育勅語講談』があった。これに加えて未刊行の『勅語演説』及び『勅語大意』がある。彼は計四種の勅語関係の著述を準備していた。今後、同時期に刊行された夥しい勅語解説書と岡本の勅語理解を対照検討することによって、岡本の思想の独自性を明確化したいと考える。

二 アジア主義の問題

次にアジア主義に関する問題であるが、これについては明治三〇年代に入ってから著作に十分の注意を払わねばなるまい。すなわち日清戦争と日露戦争の間に書かれた著作群である。当時、対清・対露政策に対して幾多の著作が世に問われた。

たとえばその最も尖鋭化した主張の代表例として明治三六年の七博士建白事件で知られる戸水寛人(註29)が残した『文明時代之道德』『新国民』『亜細亞東部ノ覇權』等の著作のほか、福本日南(註30)の『愛國主義』などは、岡本の位置づけを行う上で重要な手がかりとなろう。では岡本の著作の中から、この問題に関連する記述をいくつか追ってみた。まず『大日本中興先覚志』に寄せられた林琴南(註31)の序文を見てみる。

「韋庵先生……其の書を挾んで東南に遨遊^{ごうゆう}して武林に及び、余を林伯願大令家に訪ぬ。二書を袖出す。一に曰く『鉄鞭』、一に曰く『日本先覚志』。『鉄鞭』は世士を針砭^{しんぺん}（註32）するを主とし、『志』は則ち其の本国の先覚を伝ふ。嗚呼、先生の志、偉なり。夫れ日本の力めて幕府の旧轍に反し、……遂に日々文明に臻る。此れ蓋し東亜の治に向ふの先声にして、黄種復古の上烈なり」（大日本中興先覚志）林琴南序）

ここに見える「東亜の治に向ふ」「黄種復古」などの語に、林琴南の『大日本中興先覚志』に対する位置づけを読み取る事ができよう。これが伊藤賢道の跋文になると、日本の中国に対する当時の意識がより明確化している。

「其（中国）の国を新たにせんと欲すれば、吾が日本の当に易易たるを視よ。而れども反つて未だ日本のごとく更始（註33）するあたはざるは、豈に国体の未だ一ならざるに、人智の未だ闕^{ひら}けざるを抑へんや。韋庵翁、既に『西学探源』『鉄鞭』等の書の刻するあり。開導社、又其れ是の書を刻す。……凡そ広く支那人の智を闢^{ひら}き、今茲^{こんし}（註34）にして更始して、必ずしも日本向昔の難を為さざらしめんと欲す。此れ則ち韋庵翁の心にして、亦賢道の心なり」（『大日本中興先覚志』伊藤賢道跋）

ここには「吾が日本の当に易易たるを視よ」或いは「支那人の智を闢く」といった言が見え、当時の日本のアジアの先駆者・主導者としての自意識がはっきりと表れている。そして少なくとも伊藤は

それが「韋庵翁の心」と明示している。

岡本のアジア構想に対する詳細な論究は今後の課題であるが、ひとつ象徴的な例を次に提示しておきたい。『大日本中興先覚志』の西郷隆盛の項の末尾部に付された岡本のコメントである。ここには岡本の朝鮮・清・露三国に対する立場が明確に示されている。

「明治二年、余、開拓に官たり。盛^{さか}に北征の説を陳ぶ。僚属（註35）堀基をして隆盛に見え余の志を言はしむ。基は薩人なり。余の推薦せし者なり。隆盛謂ふ「身、北海に赴きて、万里の長城と為らん」と。余、之を聞きて喜ぶ。往きて訪ぬるも、其の亡きに遇ひ、未だ再訪するに暇あらずして去る。其の兵を挙げ難に抗する（註36）に方り、余、兵事新聞（註37）に主筆たりて、為に三策を陳べて紙上に登録す。謂ふ「上策は須らく部下の壯士を拉^ひいて直に朝鮮に航し、八道（註38）を席卷し、其の民を乱すを誅し、王に我と連合して一と為らんことを勧め、清人と提携して兄弟と為り、進みて東北に抵^{いた}りて俄人（註39）を樺太より逐^おひ、黒龍（註40）を跨^{また}りて鼓行（註41）して西せん。……」と。以て隆盛に示して図を改めしめんと欲するも、遂に達するあたはず。今に至りて遺憾と為す。……今者、俄人南進すること、火の原を焚^もくが如し。而れども我と清国と一人も長城と為る者なし。豈に悲しからずや。噫^{ああ}」（『大日本中興先覚志』西郷隆盛）

ここには、明確に日・韓・清の連合を以てロシアの南下政策に對抗すべきことが説かれている。また欧米に対する意識についても二

つほど紹介してみよう。

「泰西に僅々たる大小国の平權制あるを羨みて、比隣なる露西亞の獨斷政制を問はざるが如くは何様の大變を醸さんも測りがたし。露國が政教を一致にし、自ら政教の主權者と稱し、虛無黨の毒蠱を顧みざるは、國威を宣揚するに於て不便なるがためならずや。今日に在りて、此に遠慮する所なく、妄想の説を吐露するは、露人の奴隸となるを促すものなり。争か大日本國獨立の一丈夫と稱することを得ん。今日外人の我を侮辱する状あるものは露人に止まらず」『亞細亞之存亡』

「露人は文明の公敵にして、平和の深仇と稱する所なれば、萬國の力を合して遏絶すべきものなるべけれど、平權同等の説を持して、君父を輕蔑し、米利堅一百年來の習慣を羨み、祖宗數千年來の大典を侮り、人心の決して和すべからざるを問はずとせば、一家も和せず、一村も和せず、一郡一県も和せず、終には全國を挙りて和せざるに至らん。此理は火を觀るよりも明白なるものなり。果して然らんに、焉ぞ國人の力を合せて外國に當ることを得ん」『亞細亞之存亡』

日本という國家は「今日外人の我を侮辱する」状態にある。とりわけ「文明の公敵」「平和の深仇」とも言うべきロシアは最も脅威と言つてよい。かかる状態にあつて、日本は「獨立の一丈夫」となるべく「國人の力を合せて外國に當らねばならない」との主張である。日露開戦四年前の記述である。

おわりに

以上の点を踏まえて、岡本章庵の一端を論じるならば、岡本は西洋の實學方面の文明を受け入れる点、日本の宗教や文化の獨自性を主張する点、ロシアの南下政策に対する危険性を主張する点、中国・朝鮮の教導を唱える点（註42）などから、たとえば福沢諭吉や岡倉天心といったよく知られる所の明治の文化人、また先にも触れた戸水寛人・郡司成忠・福本日南のほか、樽井藤吉（註43）・田岡嶺雲（註44）らとも微妙に異なる思想を有していた。新たな座標軸として一考するに足る人物であると同時に、明治という時代を再考するための格好の対象と言えよう。

最後に、明治三十七年に岡本が没した後、『太陽（註45）』三八号に岸上質軒の筆による「岡本章庵（樺太最近探索者）」というタイトルを追悼文が明治三十八年に掲載されている。それを紹介したい。

「三十六年二月、偶々、ま腦溢血の症に罹り、口言ふこと能はず、双手自由を失し、医治遂に効なし。然るに三十七年征露の役起るを聞くや、欣然病痼の身に在るを忘るる如く、日に戰報を聞きて以て快とせり。同年十一月九日、特旨を以て正五位に叙せられしが、同日終に小石川諏訪町の寓に卒す。享年六十有六、超て十三日、麻布笄町長谷寺に殯葬せり。

翁平生奇材を有し奇志を抱き、而して轆轤（註46）不遇を以て終る。亦哀むべし。然れども王師既に樺太全島を平定して、翁の宿

志今や貫徹せり。況んや翁の名は其等身の著書と共に永く不朽なるをや。吁、翁以て限すべきなり」

岡本理解のためには教育勅語の問題とアジア主義の問題という二つの巨大な頂を越えねばならないことは先に述べた。本稿ではこの問題に詳細に触れることはしなかったが、この二つの問題に真正面から取り組まねば、真正な岡本理解に至り得まい。そしてこの真正なる岡本理解は明治維新から現代へと至る日本という国家の真正理解へもつながり得ると考える。

一註

(1) 筆者が今までに提出した岡本草庵関係の拙論は以下の通り。

「岡本草庵『支那遊記』翻刻・訳註(一)」「(徳島大学国語国文学八)九」

「岡本草庵『支那遊記』翻刻(一)」「(三)」(徳島大学総合科学部紀要言語文化二)四

「岡本草庵『烟台日誌』翻刻・訳註」(徳島大学総合科学部紀要言語文化四)

「岡本草庵『清国遊記』翻刻・訳註稿」(徳島大学総合科学部紀要言語文化六)

「岡本草庵『勅語演説』翻刻・訳註」(徳島大学国語国文学一六)

「岡本草庵『越山先生伝』翻刻訳註」(四国大学学報一一)

「岡本草庵『越山先生伝』翻刻訳註」(四国大学学報一一)

「投稿者東洋航客」(徳島大学国語国文学一三)

「岡本草庵の著作」(徳島大学総合科学部・総合科学型プロジェクト『近世

から近代に至る』Ⅲ―第三章)

(2) 出版年は未詳。明治二十二年刊は国立国会図書館の推定による。本書は内田周平との共著であり、後半の老荘学は内田が執筆している。

(3) 出版年は未詳。明治二十七年刊は国立国会図書館の推定による。

(4) 以下の三〇種。(一)内は出版元。『北蝦夷新志』(未詳)、『朝北日誌』(北門社蔵版)・『北門急務』(北門社蔵版)・『東洋新報』(一)三、一〇二(一〇号)『(兵事新聞)改本局』・『万国史記』(岡本氏蔵版)・『要言類纂』(岡本氏蔵版)・『小学読本農学入門』(薔薇樓蔵版)・『小学新編』(岡本蔵版・内外兵事新聞局)・『万国通典』(集義館蔵版)・『古今文體』(岡本氏蔵版)・『義勇芳軌』(岡本監輔出版)・『国史紀要』(大野幾運発行)・『儒学』(孔孟学・老荘学)・『哲学館』・『岡本子』(岡本監輔)・『祖志』(哲学書院)・『千島見聞録』(未詳)・『非売品』・『耶蘇新論』(哲学書院)・『支那学』・『経学』(哲学館)・『名神序頌』(岡本監輔発行)・『万民宝典』(鈴江彦太郎発行)・『越山先生伝』(岡本監輔発行)・『教育勅語正解』(吉田章五郎発行)・『亜細亜之存亡』(哲学書院)・『国文之榮』(東京日新舎)・『孝経頌義』(上海商務印書館)・『鉄鞭』(上海商務書館)・『西学探源』(上海商務書館)・『大日本中興先覚志』(開導社)・『日本維新人物志』(金港堂)・『教育勅語講談』(大日本中学会)

(5) 徳島県教育委員会編『岡本氏自伝・朝北日誌』(徳島県教育委員会・昭和三九年)。一四一頁。

(6) 『開拓事宜』は『朝北日誌』の末尾に附録として掲載されたものである。

(7) 漢学者。会津藩出身。藩校日新館を経て昌平黌に学び、また洋学にも精通していた。藩命により樺太を守り、また蝦夷に六年の間留まつた。幕末期

は奥羽越列藩同盟の一員として官軍に抵抗。維新後は太政官、文部省を歴任した後、東京大学教授となる。また斯文会の講師も務めていた。

(8) 徳島県立図書館岡本韋庵先生蔵書目録2、266(544)

(9) 明治後期の軍人で、千島開発者。明治二六年にロシアに対する北方警備を説き報効義会を設立し、仲間とともに占^{シム}守島に上陸。同二九年に再上陸し開発を行った。

(10) 安井秀直出版、明治二六年。二五〇二七頁、三六〇三八頁に岡本と郡司の関わりが詳細に記されている。またこの外に『東洋ニ対スル露國之實際経緯』(報効義会東京支部、明治三四)などの著作がある。

(11) 『延喜式』に記述の見える徳島県内の神社を一つ一つ紹介したもの。

(12) 岸上質軒「岡本韋庵(樺太最近探検者)」(『太陽』二二号・明治三八年)。

(13) 目次は以下の通り。第一巻：国本・内廷・宗室・氏族。第二巻：制用・政要。第三巻：学制・貢舉。第四巻：官制・考課。第五巻：秩祿・爵位・器服・邦制。第六巻：税法・職役・貨幣・国計。第七巻：農政・水利・道路・工作。第八巻：商務・警保・賑貸・衛生。第九巻：婚姻・獄訟・刑法。第十巻：兵制。第十一巻：民会。第十二巻：祭祀・喪葬・教門。

(14) 号は放浪。閑谷豊で学んだ後、早稲田東京専門学校へ。閑谷豊教授を経て上海東亞時報へ。後大阪朝日新聞に入り上海特派員となる。当時の中国問題に関わり調査研究を行った。岡本の『清國遊記』明治三三年一月三〇日、二月二日、五日、七日、九日、一七日、明治三四年二月三日、四月四日、五月一日、二七日、三二日、六月二四日、二八日、二九日に名前が見える。

(15) 採録された人物は以下の通り。上巻：日下部吾田彦・物部目連筑紫物部

大斧手・筑紫国造・大伴部博麻・和氣清麻呂・源義家・三浦義明・杵淵重光・源義仲・安賴絵・村上義光・僧良忠・楠正成・宇佐美定満・立入宗繼・大河内政房・清水高治・毛利家照・如藤清正・真鍋祐重・前田利家夫人高島氏・山口右京亮満弘乳母・尼妙林・細川忠興夫人明智氏・富田知信妻浮田氏・山田長正・浜田弥兵衛・宗五郎・甲賀孫兵衛・蒲生秀実・平山潜・梶谷平蔵兵衛・松本重信・普治・渡辺定幹・佐久間啓・月照・吉田矩方・頼醇。下巻：蘭相如・公子無忌・焚暗・藏洪・劉敏元・荀松小女潜・顏真卿・張巡・彦章・項德・察・歐陽珣・岳飛・晏氏・密祐・文天祥・鄭成功

(16) 採録された人物は以下の通り。上巻：徳川公斉昭・藤田東湖・梁川星巖・藤森天山・佐久間象山・堀田正睦・島津公斉彬・西郷隆盛・僧月照・僧月性・梅田雲漢・頼三樹三郎・橋本左内・吉田松陰・金子孫三郎・大橋訥庵・堀利照。下巻：官部鼎蔵・真木和泉・平野二郎・有馬新七・中山公子忠光・川上弥一・清水精一郎・武田研雲斎・久坂玄瑞・高杉晋作・月形洗蔵・野村望東・駒井隼庵・武市瑞山・坂本龍馬・大村益次郎・岩山公具親・三条公実・美

(17) 本書では新たに百名近くが採録されている。ここでそのすべてを提示することはしないが、主だった所を挙げれば、越前の松平春嶽、薩摩の大久保利通・川路利良、土佐の岩崎弥太郎・後藤象次郎、肥後の横井小楠、長門の木戸孝允、武蔵の塩谷岩陰・中村敬宇、日向の安井息軒、備中の山田方谷・緒方洪庵、警械の平山省斎などが加えられている。なお本書には清水精一郎は採録されていない。

(18) 内容は全二〇六条よりなるが、たとえば「走る時に息の絶へざる法」「足

の疲れを軽くする法」「水を濾す法」「山林に入るときの心得」「暑さに中りたるときの治方」といった、出征時を想定したものが多数見られる。

(19) これと同旨のものとして、自治館編輯局編『明治文藝硯海録』(明治三五年) 所収の岡本尊庵の文章もある。

(20) 徳島県立図書館岡本尊庵先生蔵書目録1・3・15(131)、下書草稿1・3・16(132)。

(21) 儒者。南部藩出身で、若くして盛岡の藩校の教官となり、後江戸の海保漁村に従い、昌平黉へ。維新後も盛岡・東京・京阪・高野山など各地で儒学を講じた。二人の交際はこの後も続き、『清国遊記』(徳島県立図書館岡本尊庵先生蔵書目録2・4・299(607))の明治三三年十一月一日に岡本の中国渡航に際し、太田代が二円を餞別としてつつんでいる記述が見える。

(22) 誇り高ぶること。

(23) 孔慶鏗。曲阜在住の孔子の末裔(ただし衍聖公(宋の仁宗の時代に、孔子の子孫に賜った世襲の称号)ではない)。

(24) 徳島県立図書館岡本尊庵先生蔵書目録2・4・297(604)及び2・4・302(611)。

(25) 徳島県立図書館岡本尊庵先生蔵書目録2・4・303(614)。

(26) 中国の皇帝が、周辺諸国の君主に王・侯の爵位を与えて君臣関係となり、これを藩国とする体制のこと。

(27) 徳島県立図書館岡本尊庵先生蔵書目録1・3・13(129)、下書草稿含む。

(28) 明治三二年・吉田章五郎発行。日本大学精神文化研究所・同教育制度研究所『教育勅語関係資料(第六集)』(昭和五三年・創文社)所収。

(29) 東京帝大法学教授で、対露強硬外交・即時開戦論を主張し、日露開戦の世論喚起を行った。

(30) 明治・大正期の新聞記者、史論家。玄洋社の前身向陽義塾で学んだ後、陸羯南の『日本』の編集幹部として活躍した。南進論を主張し、東邦協会を設立した。

(31) 清、福建の人。名は紆。後の北京大学教授。『清国遊記』の明治三四年の三月二十四日、三月二十七日、六月二十八日にその名が見え、岡本は古詩を贈られてる。

(32) 戒めること。

(33) 古いものが改まり、新しいものが始まること。

(34) 今年のこと。

(35) 同じ役職の仲間。同僚のこと。

(36) 明治一〇年の西南戦争をさす。

(37) 明治一〇年より発行された東洋新報のこと。当該部分については未見。

(38) 鶏林八道のこと。鶏林は元々新羅の国の別称で、後に朝鮮全体を称するようになった。

(39) 俄羅斯の俄で、ロシア人をさす。

(40) 黒竜江をさす。

(41) 鼓をならして進軍すること。

(42) たとえば善隣協会(後に善隣訳書館)などがこれにあたる。この問題については、狭間直樹氏の「初期アジア主義についての史的考察」(『東亜』二〇〇一年八月号・二〇〇二年三月号)の第六章・第七章、及び「善隣協会・

善隣図書館関係資料―徳島県立図書館蔵「岡本章庵先生文書」所収―（京都大学人文科学研究所漢字情報研究センター東方学資料叢刊第十冊、二〇〇二）に詳しい。

(43) アジア主義者。明治一〇年には西郷軍について策動した。明治一七年に中江兆民らと上海に東洋学館を設立。明治二六年に『大東合邦論』を著し、日韓両国が合邦して清国と連合し、西洋列強に対抗すべきことを説いた。

(44) 評論家、中国文学者。高知に生まれ、帝国大学の文科大學漢学科に選科生となった。卒業後は雑誌『青年文』に文芸評論などを書き、明治体制批判などを行った。

(45) 明治一八年に博文館から創刊された雑誌で、昭和三年まで発行。日露戦争時は国家膨張主義に迎合していた。

(46) 事が思うように運ばないさま。

―主な参考文献―

- ・郡司成忠『千島拓殖演説筆記』（安井秀直出版、明治二六）
- ・郡司成忠『東洋ニ対スル露國之實際経緯』（報効義会東京支部、明治三四）
- ・戸水寛人『文明時代之道德』（有斐閣、明治三四）
- ・戸水寛人『新国民』（有斐閣、明治三六）
- ・戸水寛人『亜細亞東部ノ覇権』（有斐閣、明治三八）
- ・成田与作『諸家対外意見筆記』（非売品、明治三三年）
- ・福本日南『愛国本義』（金港堂、明治三七年）
- ・竹内 好『現代日本思想大系9 アジア主義』（筑摩書房、一九六三）

・影山 昇「明治10年代前半期の徳育施策と福沢諭吉の徳育論」（愛媛大学教育学部紀要二二、一九七五）

・影山 昇「地方巡幸と明治天皇の学校視察」（愛媛大学教育学部紀要二六、一九八〇）

・影山 昇「教育勅語の渙発と芳川顕正」（愛媛大学教育学部紀要三〇、一九八四）

・伊東昭雄『思想の海へ（11）アジアと近代日本―反侵略の思想運動』（社会評論社、一九九〇）

・平石直昭「近代日本の「アジア主義」―明治期の諸理念を中心に」（東京大学出版会『アジアから考える（5）近代化像』所収、一九九四）

・長山増生『日露戦争』（新潮新書、二〇〇四）

*本稿は平成16年3月7日徳島県立21世紀館イベントホールにて開催された阿波学会50周年記念事業「徳島出身岡本章庵の生きた道」に於ける口頭発表「岡本章庵のメッセージ」に加筆修正したものである。